



The Japanese Red Cross Society of Nursing Science

日本赤十字看護学会

Vol.9, 2011.

日本赤十字看護学会ニュースレター 第9号 2011年12月発行

NEWS LETTER

— 1 —



赤十字の関心には際限がなく、すべての人間に及ぶ。
人間は互いに共通の性質を持つ同胞だと考えるからである。

解説 赤十字の基本原則 人道機関の理念と行動規範 (第2版)
ジャン・ピクテ著/井上忠男訳、P43、東信堂

◀ 海外の赤十字から寄せられた救援金を財源に石巻市内の避難所9カ所に給水タンクを設置しました。
(2011年4月) 日本赤十字社 ©Nobuyuki Kobayashi

理事長挨拶

日本赤十字看護学会 理事長 濱田 悦子

厳寒の候、皆様には、ご清祥にお過ごしのことと存じます。

平成23年3月の東日本大震災で被災されたみなさまに、心よりお見舞い申し上げます。そして、一日も早い復興をお祈りしています。日本赤十字看護学会では、今年度、各委員会活動や学術集会を通して、東日本大震災の支援をサポートする取り組みをしてきました。

1. 支援活動と交流会

日本赤十字看護学会災害看護活動委員会は、東日本大震災被災地における健康・生活状況の把握と支援活動を企画し、4月後半に現地に入りました。訪問先の方々との話し合いの内容を報告書にまとめ、学会ホームページを通してお知らせしています。

また、6月に開催された日本赤十字看護学会学術集会では、「東日本大震災における赤十字救護班の看護師の活動経験知と今後の課題」というテーマで交流集会をもちました。さらに、学術集会の2日間にわたり、「写真でみる東日本大震災被災地の被害状況、救護活動、被災者の生活」の写真展示を行い、参加者が東日本大震災の様子や支援について知る機会を提供しました。

2. 被災者支援のための研修会

日本赤十字看護学会臨床看護実践開発事業委員会は、高齢被災者支援のための研修会を都内で開催しました。テーマは「東北地方の文化と言語の研修会 - 高齢被災者支援のために」で、被災者支援に行く人々のサポートの一助になればと考え企画したものです。この研修会では、「高齢者とのコミュニケーションに役立つ会話」というシンポジウムを行い、方言をつかった支援の大切さなどを確認することができました。

東日本大震災以外の学会活動についても、新たな取り組みがいくつかあります。

これまで年に1回としてきた会計監査に関して、中間決算を行うことといたしました。また、学会誌の投稿論文数を増やす方策について検討をするとともに、次年度より学会誌の発刊回数を年に1回とすることにいたしました。そして、今年度は、理事・評議員の選挙の年であることから、選挙管理委員を選出しました。

この理事・監事体制になってから、早2年半が過ぎ、私たちの任期も残すところ半年となりました。私共は、今後の残任期間を日本赤十字看護学会の変革と発展に寄与できるように努力していきたいと思っています。会員の皆様から「このような活動をしてほしい」「このような活動をしてみたい」「この活動は中止(休止)してもよい」というようなご意見がありましたら、是非、お寄せ下さい。

平成24年が始まりました。ご多忙の中、くれぐれもお身に留意され、皆様の御活躍を祈念いたします。

平成23年度日本赤十字看護学会災害看護活動委員会の活動

東日本大震災に関する活動を中心に

日本赤十字看護学会理事 災害看護活動委員会委員長
小原 真理子

東日本大震災で被災された学会会員の皆様にはこころからお見舞い申し上げます。

23年度3月11日、東北・関東地方沿岸部を襲った未曾有の大震災において、日本赤十字社は発災直後から日赤DMAT、赤十字救護班845個班(10月30日現在)、こころのケアチーム718人(9月1日現在)、看護ケア班17人(9月9日現在)、病院支援チームなどを現地に派遣し、救護活動を行ってきたことが報告されています。日本赤十字看護学会会員は、赤十字病院や看護教育機関等に所属する看護職が多く、東日本大震災の救護活動を通して災害看護の経験を積んでおられることを災害看護セミナーや活動報告会等で聴いております。

日本赤十字看護学会災害看護活動委員会(以後、本委員会)では、被災地における健康・生活状況の把握と訪問活動に続き、学会ホームページ等に活動報告を掲載、更に第12回日本赤十字看護学会指定交流集会で救護活動の経験知の分かち合いについて企画運営を行いました。今回のニュースレターでは、災害看護活動委員会の活動目的、23年度活動内容、今後の課題についてお知らせし、私どもの活動についてご理解を仰ぐとともに、ご意見を頂ければと考えます。

1. 日本赤十字看護学会災害看護活動委員会の活動目的

経験豊富な赤十字の災害看護に関する「経験知」を掘り起こし、「形式知」として共有する資料や場を提供するなど、災害看護の発展に資するために活動することを目的に、2008年に発足しました。今までも調査活動や災害看護セミナーを開催してまいりました。

2. 23年度活動方針

23年度本委員会は、以下を方針として活動してまいりました。

- ① 東日本大地震被災地の調査・支援活動を通して、日本赤十字看護学会に所属する会員への情報提供や、今後の被災地における中長期支援活動に繋げる。
- ② 東日本大地震被災地の赤十字救護活動に参加した会員の活動内容や課題などについて、お互いに分かち合う機会を企画運営し広報の役割を担う。
- ③ 東日本大地震被災地の赤十字救護活動に参加した会員の経験知や救護者のストレスなどについて、調査活動を行う。
- ④ 3年間の委員会活動のまとめを行い、今後の教育・研修へ提案する。

3. 構成メンバー

委員長：小原真理子：日本赤十字看護大学
 委員：大和田恭子：日本赤十字社医療センター看護部
 小林 洋子：日本赤十字社幹部看護師研修センター
 谷岸 悦子：杏林大学保健学部看護学科
 前田久美子：大森赤十字病院

4. 活動内容

今年度は以下の活動を行いました。

- ① 平成23年4月23日～25日東日本大震災被災地の石巻市、女川町、気仙沼市の病院及び避難所を訪問。被災地看護職、支援看護職等からヒアリングを行った。
- ② 平成23年6月26日第12回日本赤十字看護学会交流集会を企画。「東日本大震災における赤十字救護班看護師の活動経験知と今後の課題」のテーマで開催した。また同会場で関連する写真展を開催した。
- ③ ①、②について日本赤十字看護学会ホームページやニュースレターに掲載した。
- ④ 第13回日本災害看護学会組織ブースに、本委員会の活動の共有化を目的に出展を行った。
- ⑤ 赤十字病院に所属する被災看護職及び支援看護職を参加者に、「赤十字災害看護の伝承」をテーマに、継続的に研究に取り組んでいる。
- ⑥ 平成24年3月3日第4回災害看護セミナー「被災地内病院における初動体制と看護管理者の役割」のテーマで開催予定。

5. 今後の課題

今後の活動として、以下が見出されました。

- ① 日本赤十字看護学会会員を対象に、活動経験知を共有化する場づくりと広報活動の強化に取り組む。
- ② 得られた救護活動の経験知を学会協議会を通して、他学会と連携するシステムの構築を行う。
- ③ 被災地においてNPO等が展開している個別的な支援活動とも連携する。

謝 辞

大震災から9か月が過ぎようとし、新たな年明けが近づいてまいりました。

日本赤十字看護学会災害看護活動委員会メンバーとして、大震災から1か月半が経過した4月半ば、災害看護活動委員会メンバー4名、2名の協力者と共に被災地の訪問活動を展開してまいりました。被災地では急性期より状況が良い方向に向かっている部分も見受けられましたが、新たな試練もある中で、訪問した先々で多くの方が私たちの活動を御支援・御協力下さったおかげで、交流会の開催、ホームページ、ニュースレターを通して、報告することができましたことを心から感謝いたします。その後も10回被災地を訪問し、支援活動を続けてまいりましたが、復興に向かうとする皆様の心意気や取組に感動さえ覚えたこともありました。皆様の健康をこころからお祈り致します。



東日本大震災被災地訪問報告

石巻赤十字病院 看護部

日本赤十字看護学会 災害看護活動委員会委員 谷岸 悦子

石巻赤十字病院内の医療と地域・避難所、住民に対する救護が区分された。看護部は、院内での医療と看護の体制作りを担い、業務部分、人の部分と被災しているスタッフの生活支援で各看護副部長に分担した。名古屋第一から副看護部長の支援があり、看護部の運営・外部との対応に相談ができた。被災を受けたスタッフに対しても早い時期に支援が得られ、本来の役割を円滑に行うことができた。

1. 患者の来院状況と対応 発災直後は、津波による低体温症や外傷が多く、1か月半経って循環器疾患、肺血栓症、消化器系・胃潰瘍、吐血・下血、肺炎が多くなっている。避難所生活でADLが低下して起こる疾病がみられる。3月の分娩数は、通常45～50人のところ99人であり、透析は、通常60人がプラス150人～約200人で、ライフラインの復旧まで対応していた。また、平時の救急センターを活用する患者数より多いが、その絶対数は減少しつつある。救急患者を優先して入院ベッドを確保しているため、通常の入院治療が必要ながんの手術や化学療法の患者が滞っている。地域での治療再開が急務であり、現在、急患のコントロールが大きな課題である。

2. 看護スタッフの状況 3月15日から看護職の派遣が始まり、16日から看護師11名、助産師7名が、5日間クールで支援に入っている。3月29日からは、急患はER看護師に限定し、並行して一般の看護師、助産師が病棟に入っている。4月25日現在で、看護師83名、助産師78名、ER看護師59名、また3月31日からは専門学校復旧のために専任教師17名が入り、応援総数は237名である。

本社浦田看護部長のアドバイのもと、応援看護師を病棟各部署に1名配置した。病棟各部署は、応援看護師が入ることで、<週1回の2日連続休暇>の勤務体制がとれ、スタッフ個々が被災後の片づけや対応をすることを可能とした。さらに、応援看護師が救護ユニホームで病棟に入るとは、“危機的な状況である”ことを、病院にいる人々に分かっているものでもあった。職員も<被災にあった>ということで、患者や家族は遠慮して被災体験を話せない状況があったようで、「【赤の服を着た人（応援看護師）】にケアしてもらいたい」、「話しを聞いてもらいたい」という患者もでてきた。応援看護師がじっくりケアをしながら、患者の話しを聞くという関係づくりができていた。

3. 災害時のマニュアルになかった看護の取り組みとその必要性

初動体制訓練は役立ち、傷病エリアの治療部門は訓練通りにできた。想定外の一つとして、傷病者以外の＜通常の治療処置、ケアを必要としている人（緑ではない）＞を病院が受け入れる状況やそのエリア確保があった。HOTの人や胃ろうチューブのトラブルの人は、トリアージタグをつけるレベルではなく、看護職の処置・ケアで対応できる人々たちである。

4. スタッフの生活の支援 1週間から10日は、動きがとれない状況であった。1週間目はほとんど皆が病院で寝泊まりし、2週目はホテ

ルで、3週目からガソリン対応ができた状況である。職員・患者の食糧は、病院の備蓄で対応し、朝昼晩と患者・職員には提供できた。4月10日までは栄養課で職員全員分を準備していた。“こころのケア”として設置した“リラクゼーションルーム”はスタッフの拠り所になった。また、心のケアの看護師より、看護部新人担当者が気づかないところで悩んでいた新人看護師の情報をもらい対応することもできた。

5. 病院支援隊の姿勢として助かったことは、看護職間で申し送りノートを作り、現場で申し送りを具体的に、直ぐ動けるシステム作りをしていたことである。

東日本大震災被災地訪問報告

石巻赤十字看護専門学校

石巻赤十字看護専門学校は、石巻市吉野町にあり、今回の地震・津波により甚大な被害を受けた地域である。専門学校では前日に平成22年度の卒業式が行われ、発災時は、1、2年生が授業を受けていた。発災後近所の住民も学校に避難してきた。津波発生が知らされ間一髪、学生、教師は避難してきた住民を助けながら地域の指定避難所である湊小学校に逃れ、全員無事であった。前日に卒業した卒業生も全員の無事が確認できた。発災当初、1960年チリ地震による三陸沿岸の津波を経験した住民も今回の津波の発生は予想せず、学校に避難すれば大丈夫と考えていたようだ。

津波により、専門学校の建物は1階が壊滅し、教材、図書、記録類もすべて消失した。授業ができる状態ではなく、しばらくは石巻専修大学（石巻市南境）の一角が仮校舎になる。訪問した4月25日は学

日本赤十字看護学会 災害看護活動委員会委員 小林 洋子

生の生活や学習環境把握・支援整備のため登校日にあたっており、学生と教師が震災後初めて顔を揃えた。「学生の顔をみると元気が出る」と教師は語っている。廊下には演習用のベットが数台置かれているが図書や教材などまだまだ、揃えなければならないものはたくさんある。

教師、学生ともに被災者でもあり、生活基盤が整わず、震災のストレスもあるが、3人の学校支援専任教師の支援を得て、6月からの新学期、新入生、新2、3年生の授業再開に向け、準備が進められている。

また、震災直後学生と教師は、住民とともに避難所に避難した。食料も無く、水は一人当たりコップに4分の1程だった。このような中、学生たちは、避難所のトイレの掃除や被災者をケアし、緊急事態の中でケア提供者としての役割を十分発揮した。

東日本大震災被災地訪問報告

有限会社あおい訪問看護ステーション

1. 施設の概要

有限会社あおい訪問看護ステーション（代表取締役小野久恵氏）は、3つの訪問看護ステーションから成り、仙台市若林区にあおい訪問看護ステーション（訪問看護）とあおい訪問看護ステーション（居宅）が、黒川郡富谷町にあおい訪問看護ステーション富谷（訪問看護）がある。各ステーションでは看護師が所長を務め、所長以下看護師4名、事務員1名、理学療法士1名等で構成されている。総数166名の利用者の方に対応している。利用者には、在宅酸素療法や人工呼吸器などの医療依存度の高い方もいる。

2. 発生時の状況

3月11日14時46分、地震発生。震度6強の揺れが5分以上続き、訪問看護ステーション近くまで津波が押し寄せ、広範囲で壊滅的な被害が生じた。ライフラインは電気、水道、電話が断絶された。発災当日、携帯電話は繋がらず、携帯のメールが辛うじて繋がった。

3. 発生時の看護師の行動

1) 在宅酸素療法被災者の救出搬送

看護師が在宅酸素療法の方を訪問しケアが終了したところで地震が発生した。住まいが13階建マンションの7階でかなりの揺れで、利用者と家族、看護師の3人は床の上を3mぐらい引きずられた。地震発生から1分ほど経過して停電し器械も全て停止した。利用者は酸素が止まりどんどん顔色が蒼くなってしまい、地震が一時的に弱くなった瞬間に、酸素マスクを予備ポンベに切り替えて地震の間を凌いだ。揺れが止まった後、電気と電話はしばらく無理と確信し、脱出しようと思ったが、玄関がマンションに設置されていた給湯バックで塞がれ、ベランダに非常用梯子もなかった。民生委員の方が、真っ先に駆けつけマンションの管理からレスキュー隊に連絡してくれた。午後4時過ぎによやくレスキュー隊が到着し、おんぶして1階に下ろしてもらい、訪問看護師の車で病院に搬送した。予備ポンベは6本あり、1本あたり1時間利用でき、最大6時間しかもたない。幸いにも、レスキュー

日本赤十字看護学会 災害看護活動委員会委員 前田久美子

隊も間に合い、大事に至らなかった。

2) 人工呼吸器使用被災者の搬送

避難を呼びかける中、自宅で人工呼吸器使用を使用している方に対応する先輩のフォローに向かった。避難する人々と逆方向に向かうことになった。先輩が電源を確保するまで、アンビューバックを押し続けた。途中、「津波が来る、逃げろ」の電話があったが、対応を続けた。不安で一杯だった。無事電源が確保でき、区役所保健師と連携を取って、利用者を病院に搬送できた。しかし、利用者は、表情一つ変えることはなかった。

3) 在宅看護ケアの継続

安否調査により、避難所には行けず、病院での受け入れが不可能な利用者があることを把握し、自転車で訪問看護サービスを再開した。夜間対応などのためスタッフが交代で訪問看護ステーション事務所に泊まりながら、少しずつ体制を整えていった。

4) 救護班への参加

看護師1人は自宅が浸水し避難所（400名ほど収容）に避難した。避難した当日から、看護師として被災者の健康を気遣うだけでなく、時に心臓マッサージや応急処置などにあたった。一人で400人の被災者に対応していたので、健康管理や救急対応から逃れられない状況になった。その結果、被災当日から訪問看護ステーションには戻れず、休みなく1か月間、活動を続けた。

4. 訪問看護ステーションの対応

1) 安否確認、2) スタッフ間の情報の共有、3) 不安を訴える利用者への対応

5. 訪問看護ステーションの管理者に必要なこと

管理者は、(1) 職員の安否確認 (2) 現地の状況把握と確認 (3) 利用者の安否確認と情報の共有 (4) 避難所巡回による連携 (5) ガソリン調達等に関する行政との交渉 (6) 災害時マニュアル見直しなど、を行う必要がある。

第12回 日本赤十字看護学会学術集会開催の報告

第12回 日本赤十字看護学会学術集会
岡崎美智子(国際医療福祉大学福岡看護学部)

梅雨の長雨の間隙を縫うように真夏の青空が晴れ渡った平成23年6月25日(土)、26日(日)の2日間、メインテーマ「看護の原点をたぐりよせ未来へつなぐ英知」のもと、第12回日本赤十字看護学会学術集会が国際医療福祉大学福岡天神キャンパスで行われた。2日間で延べ数530人以上の学会員・非会員である臨床・地域で活躍する看護師、教員、大学院生が訪れ、福岡看護学部の教員および学生も企画委員・実行委員として多数参加した。学術集会の運営を支えてくださいました九州・山口・四国ブロック看護部長、福岡看護学部の教職員、学生ボランティアの皆さまおよび参加くださいました会員の皆様ありがとうございました。

1日目は、「看護の原点をたぐりよせて」というテーマで会長講演を行い、特別講演に陽 信孝(みなみ のぶたか)氏(山口県萩市金谷天満宮宮司、元萩市教育長)を迎え、「優しさの心って何?一朝顔やつるべとられてもらい水」をテーマとした講演を開催し、一般市民へも公開した。

2日目は、教育講演Ⅰに山内豊明氏(名古屋大学)による「フィジカルアセスメントをどのように看護基礎教育に位置付けるか」、教育講演Ⅱに菱沼典子氏(聖路加看護大学)による「看護を言葉にし、データで示す」の演題で講演が行われ、聴衆から素晴らしい、臨床に活用できるなどの反響を得た。さらに、シンポジウム「未来へつなぐ看護の英知」では、座長 新道幸恵氏(日本赤十字広島看護大学)のもと、看護専門職としてジェネラリストの教育をどのようにしていくかに焦点をあて3名のシンポジスト、川西美佐氏(日本赤十字広島看護大学)、石石陽子氏(日本赤十字医療センター)、佐々木幾美氏(日本赤十字看護大学)らの提言から100年後の未来を見通した看護の英知が語られ活発な意見が交わされた。

指定交流集会では、研究活動委員会「研究が学会誌に掲載されるまで—日本赤十字看護学会研究助成を受けて—」、国際活動委員会「国際活動の経験を共有し、看護の原点を見つめ直そう!」、災害看護活動委員会「東日本大震災における赤十字救護班看護師の活動経験知と今後の課題」、臨床看護実践開発事業委員会「急性期病棟における不穏患者のケアに活躍するチームの力」をテーマに、各会場とも50名~100名近い参加者を得て躍動的な意見交流が行われた。

また、自主的参加の交流集会は、2題の話題提供が行われ、川西美佐氏(日本赤十字広島看護大学)「Up to date 型映像教材を活用した卒業後技術教育」、道重文子氏(大阪医科大学)「口腔ケアのエビデンスと評価の実際」と、いずれも意義深いテーマであった。

その他、研究発表(口演・示説)54演題を通して活発な討議が行われた。中でも「東日本大震災、写真に見る被災者のくらしと救援活動」の写真展・DVD(日本赤十字社制作)上映による40日間救護活動は、参加者の注目を引き看護師の方々や一般来場者、大学院生・学生などが熱心に見聞きしていた。

さらに日本看護系大学協議会の協力を得て、中・高校生を対象にした体験講座「ナース・サイエンス・カフェ in 福岡」も開催し、100名以上の参加者を得た。学術集会後の調査結果では、2日間一貫性のあるプログラムで遠くから参加してよかった。新たな知見が得られ自分の看護を考える機会になった。著名な講師の講義を聴くことが出来て多くの学びを得たと、おおむね好評であった。

今後も医療の現場で活躍し続ける看護師の方々の研究、教育がさらに充実するように、この学会の継続を祈念すると共に、この学術集会の企画・実行にあたり多くの関係者の方に尽力いただいたことに深く感謝申しあげます。

第13回 日本赤十字看護学会学術集会のご案内

<臨床看護のグランドデザイン>

第13回 日本赤十字看護学会学術集会
阿保順子(長野県看護大学)

日本の臨床看護は、科学とアートの両軸の往復を繰り返しながら、いまは自然科学的思考へと回帰しようとしています。その裏では、数多くの工夫と創造による優れた看護的技術が自然科学的な検証になじまないうえに忘れ去られ、臨床看護の現場では、経済効率優先の前に手間暇かかる看護技術は捨て去られていきました。そんな中で阪神淡路大震災と東日本大震災が起こりました。日常と非日常がコインの表と裏であることを私たちは思い知りました。生老病死が人にとって避けたい事態であるかぎり、日常は常に非日常と背中あわせです。看護は、日常的営みを特化して職業になったがゆえに専門性という非日常的営みを獲得する必要性に迫られました。非日常々々の専門性が学問に昇華され体系化されても、実践に移される時には再度人々の日常に戻されることが必要です。二つの大震災は私たちにそれを教えてくれました。

そのような観点からいまいちど、臨床看護を考え直す必要を感じます。私たちがいま手にしている看護の対象者である人間についての理解は一面的すぎないでしょうか。人々の生命の消耗を最小にするような看護技術は創造されているのでしょうか。病院や地域、有事の場といった具合に、看護が展開される場が分断されてはいないでしょうか。本学術集会では、「看護の対象者」「看護の方法」「看護が展開される場」という、看護を構成している要素を日常と非日常という観点から考え直してみる第1歩にしたいと思います。

上記の趣旨のもと、本学術集会では、3つの大きな企画をたてました。

一つは、『批評空間：日本の臨床看護の明日に向けて』というタイトルでの対談です。2011年ナインテール記章を受章されました南裕子先生と村松静子先生に、現在の臨床看護を批評していただき、明日の臨床看護への思考を刺激していただくと思います。

二つ目は、看護技術をめぐるシンポジウム『看護技術の再構築—身体・こころ・技術』です。身体論については、身体の問題を一貫して考え続けてきた西村ユミ先生に、解離に造詣が深い野間俊一先生にはこころ論を、そして看護技術を幅広い観点から考え続けてきた高田早苗先生には看護の技術論についてお話しいただき、座長である川島どり先生との対談のもと、看護技術の再構築に向けて皆さまとディスカッションしたいと思えます。

三つ目は、市民へも公開する特別講演です。思想家であり武道家でもある内田樹先生をお招きしています。専門であるフランス現代思想をはじめ、身体論、ユダヤ人問題から映画論、武道論まで、幅広い分野について考えを発信しています。今回の特別講演は、やはり、『東日本大震災における天災と人災』です。

今回の学会では、対談やシンポジウム、特別講演を多くの参加者が聞くことができることに配慮し、可能な限り口演発表や示説、各種交流集会との重複をさけるような時間割にしました。

長野県看護大学が建つ駒ヶ根市は、「アルプスのふたつ映えるまち」をキャッチコピーとする実に美しいまちです。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第4回災害看護セミナー開催のお知らせ (日本赤十字看護学会 災害看護活動委員会主催、日本赤十字看護大学 災害看護専門的看護師人材養成事業共催)

テーマ: 「被災地内病院における初動体制と看護管理者の役割」

日時: 平成24年3月9日(土) 13時30分~16時30分

場所: 日本赤十字看護大学 201教室(東京都渋谷区広尾4-1-3)

参加費: 無料

開催主旨: 平成23年3月11日東日本大震災は、広範囲におよぶ地震と巨大津波、そして原子力災害を考慮した救護・看護と今までにない対応を迫られています。マネジメントの立場にある看護管理者の発災直後の想い、初動の経験を通してのメッセージをいただき、災害発生時の初動(発災後24時間)における看護職のそれぞれの立場での役割を討議したいと考えています。

シンポジストには、入院患者・職員の安全を図りながら、被災者の受け入れや地域への救護班派遣等にあたった被災病院の看護管理者、および新たな災害である原子力災害への対応を行った看護管理者の方々をお願いしています。

プログラム:

講演「東日本大震災における日本赤十字災害看護活動委員会の活動と今後の課題」

講師: 小原真理子氏(日本赤十字看護大学)

シンポジウム

シンポジスト: 1) 金 愛子氏 石巻赤十字病院 看護部長
2) 坂元 和子氏 いわき市立総合医療センター 副院長兼看護部長
3) 上杉みつえ氏 大田原赤十字病院 看護部長
4) 隈本美香子氏 岩手県立金石病院 看護師長

申込: 日本赤十字社幹部看護師研修センター(小林) FAX03-3407-1269

締切: 平成24年2月24日(氏名、所属、TELを明記しFAXで申込ください。)



NEWS LETTER The Japanese Red Cross Society of Nursing Science Vol.9, 2011.

日本赤十字看護学会ニュースレター 第9号 2011年12月発行

●発行 日本赤十字看護学会 広報委員会

愛知県豊田市白山町七曲12番33 日本赤十字豊田看護大学内 FAX 0565-37-8558

●学会ニュースレターは学会ホームページからダウンロードできます。

<http://jrcsns.umin.ne.jp>

●学会ニュースレターに関する皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。

t-takeuchi@rctoyota.ac.jp

sugiura@rctoyota.ac.jp までお願いします。

●編集後記

皆様のご協力を賜り、第9号ニュースレターを発刊することができました。本学会及び委員会の活動について、会員の皆様の忌憚ないご意見を歓迎いたしますので、ホームページ上の掲示板、あるいは広報委員会へのメールなどを活用しご連絡ください。お待ちしております。